

【研究ノート】

談話的言語を可能にする文法から見えてくるもの

青 木 文 夫*

Resumen

En el presente apunte del estudio quisiéramos poner en claro que algunas reglas formales de C_{HL} explicarán los fenómenos típicos del discurso, por ejemplo el *que* enunciativo como en “Juan dijo *que* cómo se llamaba el señor” introduciendo algunos conceptos de la parte de la gramática formal. Y además discutiremos que la existencia de tales reglas estará en correlación con el grado de la cohesión propia del discurso.

序

有性名詞に対格が付与される際に、その名詞の前に小辞 a が出現したりしなかったりする現象について、青木 (2001) と青木 (2006) ではミニマリスト理論の素性照合の立場からあれこれ議論してきた。その続きは別稿ですとして、青木 (2006) ではこのような問題には素性照合が関与しているとしても、文法を越えた要因が形式的な記述を難しくしているのではないかということを示唆した。以下の論では、斉藤 (2011) が談話的言語の度合いに関して議論したスペイン語の間接疑問文や補文標識の問題からそのような方向が存在することを示唆したい。要点を述べれば、スペイン語にも談話的な言語の度合いがどの程度かを決定するのに関わる文法の規則が存在すること、逆に言えば、文法の規則自体は形式的に自立したものであるが、別の部分ではその言語の談話的な度合いに相関するようになっているという主張で、以下ではその論を展開するための理論的な枠組みを研究ノートとして概観してみたい。

1. 斉藤 (2011)

斉藤 (2011) の議論を簡単にまとめてみる。まず、斉藤 (2011) は結論で「日本語が談話的言語であれば、その性質を可能にする文法的特徴を有する筈である」と述べ、その一例として、英語の *that* が命題を表示する補文標識であるのに対し、対応するよう見える日本語の

「と」は英語とは異なり直接引用の言い換えを示す補文標識であるため、発話や考えをより直接的に文構造に取り込むことを可能にしていると述べる。そして、同じようなことが斉藤 (2011) ではスペイン語についても言えるとして、他の言語でも談話的性質を可能にする現象が共通して存在することを示している。それは概略次のようなものである。

問題になるのはスペイン語における間接引用の *que* であるが、これについては斉藤 (2011) でも引用されている Plann (1982) や Rivero (1994) でも広汎に議論されている通り、主動詞によって共起できるものとできないものがあることは、よく知られている事実である。先ず、その点を日本語のほうから眺め、斉藤 (2011) で説明されている例から述べる。

- (1) a 花子は[_{CP}[_{TP}太郎が次朗に会った]と]思っている
- b *花子は[_{CP}[_{TP}太郎が次朗に会った]か]思っている

- (2) a *花子は[_{CP}[_{TP}太郎が次朗に会った]と]知りたがっている
- b 花子は[_{CP}[_{TP}太郎が次朗に会った]か]知りたがっている

- (3) a 花子は、[私が天才だ]と思った (直接引用)
- b 花子は、自分が天才だと思った (間接引用)

(1a-b) と (2a-b) のような例の補文標識「と」と主動詞について、どのような動詞が「と」と共起できるのか、他の補文標識「か」、「の」、「かと」などとういったときに可能かを考えたとき、「と」は (3a) のような直接引用に特化された補文標識であるとされ、そういった直接引用が可能な場合のみ (3b) のような間接引用が文法的になるとする。同様にスペイン語の次の例の *que* も日本語の引用に特化された補文標識「と」と同じタイプの補文標識ということになるというのが、斉藤 (2011) の主張である。

* 福岡大学人文学部教授

- (3) a Murmuró que con quién podía ir.
 b Murmuró: “¿Con quién puede ir?”
- (4) a *Sabía que con quién podía ir.
 b *Sabía: “¿Con quién puede ir?”

基本的な問題は、上記 (3a-b) と (4a-b) の文法性の違いで、理論的形式的な枠組みでの論争は CP の構造 (CP-recursion かどうかなど) であったり、wh 移動に関する Minimalist の枠組みで言うところの minimal link (最終的にはさまざまな文法の原則がある中で、一例として “attract” などに帰結する条件) や wh の島の現象とか素性照合の問題であったりということになるのだが、ここではそういった問題にはあまり触れることなく、主要な論点を談話的な文法規則という点に絞って議論したい。逆に言うと、上記 (3) と (4) の文法性の違いを説明する形式的な記述があるとすれば、それはスペイン語が日本語のように談話的言語であることに結びつく規則であることになる。そうすると、上述の Plann (1982) や Rivero (1994) に加え Suñer (1992) など述べられているように、先ず基本にあるのが (4b) のように直接引用を許容しない動詞とは間接引用の *que* は共起できないということで、逆に言うと、直接引用を許す動詞だけが間接引用の *que* と共起できるわけである。そこで問題は次のようになる。

- i. 間接引用の *que* を許容する動詞の意味分類は語彙部門で形式的にできるのか。すなわち文法 (C_{LH}) で記述可能なかどうか。
- ii. もし、そのような記述が形式的にできない場合があれば、それにはどんな要因が絡んでくるのか。

ここでの筆者の興味は ii の点である。

2. スペイン語の間接疑問構文から

先ず、その議論の一つを見てみたい。多くのネイティブスピーカーにとって次のような例は容認できる。

- (5) Sabía que con quién podría ir si hiciera buen tiempo.¹

この例と本文 (4a) との間には主動詞の意味の違いはな

いが、補文に条件節が付加されているという違いに加え、(4a) の例とは異なり、仮定法過去 (または過去完了) の間接引用には時制の一致が生じない (*Sabía que con quién habría podido ir si hubiera hecho buen tiempo.* とはならない) ということから、こういった例が間接引用の形式であるにもかかわらず直接引用に近いものであると言えるかもしれない。

- (6) *Sabía: “¿Con quién podría ir si hiciera buen tiempo?”

しかしながら、(5) を (6) のような本来の直接引用にした場合の判断は話者によって異なるが、多くの話者にとって容認できない²。さらに、主動詞が現在形の *Sabe que con quién podría ir si hiciera buen tiempo.* も容認可能であるので、こういった場合の *saber* と共起できる *que* も間接引用の *que* と考えられる可能性が高く、動詞の意味だけでは *que* の出現条件を厳密には定義できないと思われる。

次にこういった例も含め adjunct を補文内で前置したらどうなるのかという議論がある。Suñer (1999) でも述べられているように、間接引用の *que* と共起できる動詞の補文内では様々な adjunct の前置や項 (argument) の left dislocation などが許される (Suñer (1999) から引用した次の例を参照)。

- (7) a Preguntó que ella, cuándo tenía que ir.
 b Preguntaron que si llegaban a tiempo a dónde los llevarían.

これに対し、間接引用の *que* を許容しない動詞では、次の例のように adjunct の前置は許容されないという議論が一般的である。

- (8) a Juan sabía a dónde iba cuando tenía tiempo.
 b *Juan sabía cuando tenía tiempo a dónde iba.
 c *Juan sabía que cuando tenía tiempo a dónde iba.

(8b-c) はどの話者にとっても全くダメであるが、(8c) については、あるインフォーマントから次のような感想があった: 「僕は言わないが、田舎のスペイン語だとありそうな気もするし、(8b) よりはわかりやすい (原文

¹ 福岡大学 Bernardo Villasanz 教授他の指摘による。

² とはいえ、(6) がまったくダメというわけではないという話者もいる。これらの例は (4a) の容認性について議論していた際に、ネイティブスピーカーがこれならどうだという感じで出てきた例で、もちろんその話者も (4a) は完全に認めない。しかし、(6) については? は付くものの、(4b) ほどは悪くないという感想があり、あくまで *que* を直接引用の補文標識とするなら、何らかの理由で (6) のような例も完全に非文ではなくなった結果 (5) が可能になっていると考えることができるが、その要因が文法を超えたところにあるのかどうかは、これからの議論に拠る。

スペイン語)」。この意見をそのまま受け入れるのは無理だとしても、間接引用の *que* を入れることによって、(8b) と (8c) の容認可能性に差が生じているのではないかという仮説が立てられる。その是非はしばらく棚上げにしておいて、次に Rivero (1994)、Suñer (1999) などで広汎に議論されている次の対について考えてみたい (Suñer (1999) よりの例)。

- (9) a Pili repitió cuántas veces se había peleado su amiga con el novio.
 b Pili repitió que cuántas veces se había peleado su amiga con el novio.

こういった例について Plann (1982) 以降主張されているのは、Plann の用語を借りれば (9a) は [+wh, -QU] (semiquestions : Suñer の用語では improper indirect questions (preguntas indirectas impropias)) で、(9b) は [+wh, +QU] (questions : Suñer では genuine indirect questions (preguntas indirectas genuinas)) となる。これに従って (9a-b) を和訳すれば、(9a) は「Pilar は友人が何回恋人とけんかした(の)かを繰り返す(言っ)た」に対し (9b) は「Pilar は友人が何回恋人とけんかした(の)かと繰り返す(尋ね)た」となるだろう。すなわち、(9b) は間接引用の *que* があるため *cuántas* 以下がいわゆる(間接)疑問文としての解釈を受けるのに対し、(9a) では *cuántas* 以下は命題 (proposition) として解釈される。故によくある次のような会話のやりとりでは間接引用の *que* を用いるわけである。

- (10) ¿Cómo se llama usted?
 ¿Cómo dices?
 Que cómo se llama usted.

こうした形式的区別が語彙項目で可能なら、上述の問題 i についていわゆる下位範疇素性の選択という手段での解決策が提示されたことになる。

しかしながら、Plann (1982) と Suñer (1992, 1999) が上記の立場を維持するのに対し、Rivero (1994) では、疑問文以外の間接引用にも *que* が用いられ、それが省略できないのは上記 (9a-b) の区別から帰結されないとする。

- (11) Dijo que qué bonito era Madrid.

- (12) a Dijo: "A no molestarle".
 b Dijo que a no molestarle.

(12a-b) に対して、(13a-b) は当然のように非文となる。

- (13) a *Sabía: "A no molestarle."
 b *Sabía que a no molestarle.

こういった例から Rivero (1994) が結論としているのは、動詞の下位範疇化素性といった区別ではなく、直接引用と間接引用のどちらも可能にする別の要因があることだとしているだけで、それ以上の具体的な解決策は提示していない。そして何故 (5) が容認可能なのかという問題は引き続き残っている。

3. 文法と談話の接点について

このノートの最後に問題点と今後の方向を提示したい。

上で述べたように (5) の問題が残っているが、次の点から説明が可能ではないかと考えたい。実は (8b) に対して、intonation break が入った次の例 (14a) は OK である。

- (14) a Juan sabía, cuando tenía tiempo, a dónde iba.
 b *Juan sabía que, cuando tenía tiempo, a dónde iba.

さらに (7a-b) のような例を次のようにしても OK である。

- (15) a Juan preguntó que, cuando tenía tiempo, a dónde iba.
 b Juan preguntó, cuando tenía tiempo, que a dónde iba.

しかしながら、状況は間接引用の *que* の有無に関しては変わらないように思えるが、少し視点を変えて、Campos (1992) で述べられている discourse topic という考えをとり入れてみたい。

- (16) Marta dice que María la conoce.

(16) における *la* の指示は *Marta* とこの発話の外にいる誰か (discourse topic) のどちらかであるが、その構造は主節の主語の *Marta* と同一指示になるときは *conoce* の目的語の項の位置は *pro* であり、discourse topic を指示するときは Op (operator) であるという伝統的な照応理論の構造である。この方向が正しいかどうかは別にして、Campos (1992) は次の事実を指摘している。

- (17) Juan dijo que Pedro lo conocía a él.

その判断が妥当かどうかは別にして、Campos によると

(15) の *a él* は discourse topic と同一指示になれない³。その前提はスペイン語の強形の代名詞は同一文中で先行詞を持たないといけないというものである。その構造は簡単に記述すると次のようになる。

(18) [TOPIC X [CP Juan_i dijo [CP que [Pedro lo conoce a él_i]]]]

そこで Campos (1992) に従うと *a él* は sentence-internal に指示を持たないといけないので、TOPIC の位置にある discourse topic の変数 X は束縛されない。故にこの文の解釈は文脈の外に言及できないことになる。しかしながら、(16) から分かるように、省略や代名詞などによる照応関係が複雑なスペイン語のような言語では、削除された項や照応に関わる要素が文脈の外にあり、それが文法上の規則にとって可視化する場合が多いと思える。そこで、(5) のような例の構造もそれが LF で処理される段階で、(18) と同じような構造を持ち、TOPIC の位置にある変項が満たされる必要があるのではと思える。

(19) [TOPIC X_i [CP *pro* sabía [CP que (OP)_i [con quién *pro* podría ir [ADJ]_i si hiciera buen tiempo]]]]]

(19) はあくまで speculative な構造であり、X には *si hiciera buen tiempo* の文脈外の情報 (例えば「外界の事実」とか「直接引用」とか) を指示するような変項があり、それが *que* という Op によって満たされるようなことになるのかなと考えている。その同じ *que* が (9a-b) のような違いで出現したりしなかったりするときは (19) の構造があり、変項 X が満たされる時は *que* が出現して直接引用の読みが生じるのではないかと考えられる。

以上、(5) のような談話的な現象を可能にする文法は何かという本当に試論であるが、今後の研究の方向としたい。

参考文献

- 青木 文夫 (2001): 「対格前置詞 *a* と有生性について」『福岡大学総合研究所報』、243、63-67。
 —(2006): 「Esta tarde vi gente correr 対格前置詞 *a* の省略と意味について」『福岡大学研究部論集』第6巻: 人文科学編第5号、1-17。
 Campos, Héctor (1992): “Silent Objects and Subjects in Spanish.” *Current Studies in Spanish Linguistics*. (eds: Héctor Campos y Fernando Martínez-Gil) , 117-141, Washington D. C., Georgetown University Press.
 Chomsky, Noam (1995): *The Minimalist Program*. The MIT Press.
 —(2000): “Minimalist Inquiries: The Framework.” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. (eds: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka), 89-155, Cambridge, Mass, The MIT Press.
 Plann, Susan (1982): “Indirect Questions in Spanish.” *Linguistic Inquiry* 13, 297-312.
 Rivero, María Luisa (1994): “On Indirect Questions, Commands and Spanish Quotative *que*.” *Linguistic Inquiry* 25, 547-554.
 齊藤 衛 (2011): 「談話の文法—「談話的言語」を可能にする文法システム」 *Conference Handbook*, 29, 140-145, The English Linguistic Society of Japan.
 Suñer, Margarita: (1992): “Indirect Questions and the Structure of CP: Some Consequences.” *Current Studies in Spanish Linguistics*. (eds: Héctor Campos y Fernando Martínez-Gil), 283-312, Washington D. C, Georgetown University Press.
 —(1999): “La subordinación sustantiva: la interrogación indirecta.” *Gramática descriptiva de la lengua española*. (eds. Ignacio Bosque y Violeta Demonte) , 2149-2195, Madrid, Espasa Calpe.

³ 齊藤 (2011) の別の議論では、項削除の現象について LF コピーから説明しようとしている事実について、日本語は先行する文脈の項を文解釈に利用できるとしている。

ia 君はその本を持っていますか。

ib はい、[e] [e] 持っています。

それを Campos (1992) に従ってスペイン語に置き換えると iia-c の違いになるのだが、それでスペイン語の項削除の一般的な原則を説明できるだろうか今後の課題である。

iia ¿Tienes tú este libro?

iib Sí, [pro] lo tengo [Op].

iic ??Si, [pro] tengo [pro].

iic が相当悪いのは目的語の位置が [pro] だと Campos (1992) に従って sentence-internal に指示を持たないからだとすれば、こういった文での subject-object asymmetry を discourse topic によってはっきりさせることができるかもしれない。